

# 唐初期三一権実論争の起因に対する論争当事者の認識

小 野 嶋 祥 雄

## 問題の所在

唐初期の仏教界では、一分不成仏説「三乗・五姓各別」と一切皆成説「一乗・悉有仏性」、そのどちらの説が真実であるのかをめぐって、所謂、三一権実論争が行われた。この論争の起因は、歴史的事実から見れば、玄奘三蔵（六〇二―六六四年）による三乗真実・五姓各別を説く経論の訳出に求められるが、論争当事者の認識である主観的事実には、それに集約することの出来ない多様な見解が示されている。

本稿では、この論争当事者の認識である主観的事実の検討を通じて、①唐初期の三一権実論争の起因は、それ自体が論争の中で争点の一つとなっていたこと、②一切皆成説を主張した義榮（生没年未詳）や法宝（六二七―七〇三―七〇六年頃）は、『涅槃経』の教説に従ってこの論争は仏によって予言されたものであると捉えていたこと、といった二点を指摘し、従来のイメージとは異なった、唐初期の三一権実論争の実像

を浮かび上がらせることを目的としたい。

## 一 一分不成仏説に対する見解の相違

靈潤（五八〇―六六七年頃）の「十四門義」述作の経緯に従えば、この論争の起因は玄奘の一分不成仏説を説く経論の訳出に求められる。その「十四門義」には、

今諸後生未有所識、忽聞新義用為奇特。不知思忖遇便信受、及謗旧經云非仏説。為愍斯等長夜受苦須善分別。第一立有一分無仏性衆生者…後略…（『伝全』卷三・一一五五頁）

とあり、玄奘の訳経によって一分不成仏説という新たな教えがもたらされたことが撰述理由として示されている。「十四門義」は一分不成仏説に対する初めての反駁書であることから、このような経緯を踏まえれば、論争の起因は玄奘の翻訳にあったと考えられるのである。

しかし、ここで問題となるのは、一分不成仏説が玄奘によってもたらされた「新義」か否かという点である。という

のも、一分不成仏説を主張する神泰（生没年未詳）や円測（六一三—六九六年）は、一分不成仏説を「新義」とする解釈を認めておらず、このような理解に対して批判を加えているからである。<sup>(1)</sup>「十四門義」に対する反駁書である神泰の「一卷章」には、一分不成仏説について次のように述べられている。

一分衆生無仏性義、備在旧経、其来已久。非由新経論至方有此言。  
 （『伝全』卷三・一七三頁）

これによると、一分不成仏説は玄奘以前に翻訳された經典にも説かれているため、玄奘の翻訳によって新たにもたらされた「新義」ではないというのである。

このように、一分不成仏説が玄奘の翻訳による「新義」か否かということは、論師の間に見解の相違があり、論争の中で争点の一つとなっている。そのため、靈潤や彼に同じく、

直筆曰、一分無性備在旧経者、此実爾也。以『楞伽經』等先來有故、又三乘義無經不有故。但無性衆生是實義者、自玄奘西遊變風始扇、有心護法誰不慷慨。  
 （『伝全』卷三・一九〇頁）

と述べる義栄の認識よりすれば、玄奘の翻訳によってこの論争が起こったと認められるが、神泰などの一分不成仏説を主張する論師からすれば、そのような見解は誤ったものとして批判の対象となるのである。

## 二 論争の始まりをインドに求めるか否か

また、唐初期の三一権実論争の起因に関する議論には、論争の始まりをインドに求めるか否かということも問題とされている。

一切皆成説の立場から著された、法宝の『一乗仏性権実論』卷上「略述綱要章第一」には、一分不成仏説と一切皆成説の両説について、以下のように述べられている。<sup>(2)</sup>

三乗一乘、五姓仏性、経論不同。西方此土、自古迄今、執見各異、皆謂、自学為是、他学為非、未嘗惣会。今以已寡聞、略述權実、未敢即為定。唯請諸德詳其可不。

法宝のように一分不成仏説と一切皆成説の対立はインドから連綿と続いているとする理解がある一方で、インドにおいては両説の対立は存在しなかったとする見方が神泰や神昉によつて示されている。

神泰「一卷章」（最澄『法華秀句』所収）

泰法師云「羅什法師親從西国歴事聴受、知仏性義不遍有情。道生既羅什学徒、公違什師立諸衆生皆有仏性。故什法師集衆羯磨擯出道生。道生去後什師尚在」（云云）。  
 （『惠全』卷二・一五八頁）

神昉『種姓差別集』（親円『華嚴宗種性義抄』所引）<sup>(3)</sup>

唐初期三一権実論争の起因に対する論争当事者の認識（小野嶋）

二〇二

但玄奘入室神妨師『種性集』云「自慧日遐照法海東流、前秦之代童寿已前立五性差別絶無諍論。童寿門徒有竺道生（生公也）、依『法華經』立一切衆生皆有仏性等即被擯出。北涼蒙遜之世曇無讖法師翻出『涅槃經』、依此漸立一切衆生悉有仏性。至於陳代家依同\*説（家依者真諦三蔵名也）。後以大唐貞觀四年明発三蔵翻『大莊嚴論』立有畢竟不般涅槃性還同童寿（是鳩摩羅什也。秦代人也）。遂以貞觀二十一年木叉提婆（玄奘名）翻出『瑜伽』立五性別亦同明発等」（云云）。

（『大正蔵』卷七二・六二頁上）

神泰や神昉は、インドにおける一切皆成説と一分不成仏説の対立には言及することなく、玄奘以前の中国における両説の対立を述べており、インドにおいては両説の対立は存在しなかったと見ていたようである。

こうしたインドについての神泰や神昉の言説には、玄奘によるインドでは五姓各別説をめぐる諍論は存在しなかったとの情報があったと思われるが、その背景には、玄奘の翻訳によつて一分不成仏説がもたらされたのではないことを主張する意図があったと考えられる。

以上のように、唐初期の三一権実論争の起因は、歴史的事実からすれば、玄奘三蔵による一分不成仏を説く経論の訳出に求められるが、論争当事者の認識である主観的事実からすれば、そもそも一分不成仏説は玄奘によつてもたらされた「新義」と言えるのか、また、玄奘以前から両説の対立はあったのではないか、といった点が問題とされており、論争

の中で争点の一つとなっているのである。

### 三 予言された論争としての唐初期三一権実論争

論争当事者の認識である主観的事実には、この論争は仏によつて予言された論争であるとの理解が示されている。

先に挙げた義栄の「一卷章」では、曇潤と神泰の間の論争について、以下のように述べられている。

直筆曰、『涅槃經』云「我滅度後人生諍論、或言衆生悉有仏性、或言衆生非悉有也」。今禪師之与泰德互為諍論。此正如來金口所記。

（『伝全』卷三・一八八頁）

曇無讖訳『涅槃經』卷三十三「迦葉菩薩品第十二之一」には、仏滅後には種々の諍論が生じることが説かれており、その中の一つに、衆生は悉有仏性であると言う者と悉有ではないと言う者の間に諍論が起ることが述べられている<sup>(5)</sup>。義栄はこの『涅槃經』の教説に従つて、曇潤と神泰の間の論争を捉えており、義栄にとつての唐初期の三一権実論争は、正しく仏によつて予言された「如來金口の所記」なのである。

また、法宝にも同様の理解が見られる。曇無讖訳『涅槃經』卷十八「梵行品第八之四」には、迦葉仏の時代には『涅槃經』が説かれず、釈迦仏の時代になってこの經典が説かれた理由を説示する一段がある<sup>(6)</sup>。法宝は『大般涅槃經疏』卷九において、この経文に対して次のような注釈を施している<sup>(7)</sup>。

經曰「善男子至演說是典」、第二明須說意也。釈迦所化衆生、多諸煩惱、乃至、信根不立、世界不淨、小乘之人謂仏実滅、薩婆多等執一分衆生決定不得解脫、学大乘者執隨轉教不信仏常謂五性決定。仏預知今時有此執故、説『涅槃經』。今於未來広宣流布。

この中で注目されるのは、『涅槃經』には存在しない「五性決定」の語が用いられている点である。明言はないものの、大乘を学ぶ者で「五性は決定」であると言う者とは、一分不成仏説を説く玄奘門下を指しての言葉であろう。このことから、法宝にとつても、当時の一分不成仏説を説く論師達は、『涅槃經』において予言された存在として捉えられていると考えられるのである。

以上のように、義榮や法宝にとって、唐初期の三一権実論争は、『涅槃經』によつて予言されたものとして考えられている。このことは、論争当事者がこの論争の起因をどのように捉えていたのかを考える上で重要な視座となる。つまり、論争の起因については歴史的事実のみに集約されるものではなく、信仰的側面といった当事者の主観的事実からも考える必要を示唆するからである。

## 結語

以下に、これまでの考察結果を纏めておきたい。

唐初期の三一権実論争の起因については、歴史的事実から

唐初期三一権実論争の起因に対する論争当事者の認識（小野嶋）

見れば、玄奘による一分不成仏を説く経論の訳出に求められる。しかし、論争の当事者からすれば、一分不成仏説は玄奘によつてもたらされた「新義」なのか否か、また、玄奘以前から両説の対立はあったのではないかといった点が問題とされており、論争の起因はそれ自体が一つの争点となっていた。また、一切皆成説を主張した義榮や法宝は、この論争は『涅槃經』において仏によつて予言されたものであるとの理解を示していた。このことは、唐初期の三一権実論争の起因や論争それ自体が、歴史的事実のみに集約されるものではなく、論争当事者の信仰に基づくといった新たな論争像を示すものである。

1 遁倫『瑜伽論記』卷九下「測云、有人依『涅槃經』説一切衆生皆有仏性等文証謗新翻經論非是正説。此即不可。所以者何。旧『善戒經』及『地持論』皆同説無種姓人可以人天而成熟之。又旧『大莊嚴論』第一云、次分別無姓位。偈曰、一向行惡行、普断諸白法、無有解脫分、少善亦無因。釈曰、無般涅槃法者是无姓位。此略有二種。一者時迦般涅槃法、二者畢竟無般涅槃法。時迦般涅槃法者有四種人。一者一向行惡行、二者普断諸善法、三者無解脫分善根、四者善不具足。畢竟無般涅槃法者無因故彼無般涅槃性。此謂但求生死不樂涅槃人。如此等文皆同此論説無種姓。何独謗新翻耶」（『大正藏』卷四二・五二〇頁下―五二一頁上）。この『瑜伽論記』に引用される円測説は、円測が一分不成仏説の立場であつたことの根拠として、橘川

唐初期三一権実論争の起因に対する論争当事者の認識（小野嶋）

二〇四

智昭「円測による五性各別の肯定について——円測思想に対する皆成的解釈の再検討——」（『仏教学』四〇号、一九九九年）に引用されている。

2 『一乗仏性権実論』の引用は、久下陞『一乗仏性権実論の研究』（隆文館、一九八五年）による。

3 神昉『種姓差別集』は散佚しているものの、『一乗仏性慧日抄』（『大正蔵』卷七〇・一七四頁上）、珍海『三論玄疏文義要』（『大正蔵』卷七〇・二九一頁上中）にも同文が引用されている。「\*」箇所は『一乗仏性慧日抄』『三論玄疏文義要』による校訂箇所。

4 蔵俊の『法華玄賛文集』卷八十九には「玄奘三蔵欲来之時、西方諸徳云「無姓之文、若至本国、各不生信、願於所將子經論之内、略去無仏性之語」。戒賢師曰「若除其文、弥離車人解何義乎」云云。是知、五性差別実理無疑。又曰「西天論師皆立五性各別絶無諍論」云云。三蔵寒暑往来一十七年、耳目見聞百三十国、無名匠而不謁、無大義而不問。然五性各別已非所存乎。那提三蔵之所伝亦如是。何在弥離車之境、恣難印度之論談乎」とある。『法華玄賛文集』卷八十九の引用は、新倉和文「蔵俊による天台一乗批判の展開——『法華玄賛文集』卷八十九の翻刻解説研究を中心にして——」（『南都仏教』九五号、二〇一〇年）による。

5 曇無讖訳『涅槃經』卷三十三「迦葉菩薩品第十二之一」「迦葉菩薩白仏言、世尊。如來具足是知根力。是故能知一切衆生上中下根利鈍差別、知現在世衆生諸根、亦知未來衆生諸根。如是衆生於仏滅後作如是説。…中略…。或有説言犯四重禁作五逆罪一闍提等皆有仏性、或説言無…」（『大正蔵』卷一二・五六三頁中下）参照。

6 曇無讖訳『涅槃經』卷十八「梵行品第八之四」「善男子。今世衆生、多諸煩惱愚痴憊忘、無有智慧。多諸疑網、信根不立、世界不淨。一切衆生咸謂如來無常遷變畢竟入於大般涅槃。是故如來演説是典」（『大正蔵』卷一二・四七二頁下）参照。

7 法宝の『大般涅槃經疏』の引用は、朝鮮総督府発行の玻璃版「大般涅槃經疏」（唐大薦福寺沙門法宝述）による。また、法宝の『大般涅槃經疏』の解釈については、木村宣彰「法宝における涅槃經解釈の特質」（『大谷学報』五八号、一九七八年）を参照した。

〈キーワード〉 靈潤、義栄、法宝、三一権実論争、予言

（龍谷大学非常勤講師）